

株式会社 今井産業

e・Wood+

見渡す敷地の広さは予想をはるかに超えていた。積み上げられた丸太が、何台ものスプリンクラーから噴き出る水を浴びている。(株)今井産業(平川市新館)の今井公文社社長がグループ企業の(株)ランバーテック工業(弘前市清水森)に案内してくれた。木製ダンボール『e・wood+』はここで製造されている。道を挟んで両側に事務所棟、その反対側に工場棟と木材渡場を合わせて「6800坪あります」と今井社長。東京ドームの約半分もある。想像以上の規模に圧倒されながら、今井社長の後から付いていく。

廃材利用で環境貢献『木製ダンボール』 内装や商品展示棚にも簡易トイレにも

(株)ランバーテック工業に集められる丸太は、地元のものばかりでないという。他県からも、この木でスポーツ施設や文化施設の机や椅子などを作つてほしい、と丸太が送られてくるのだそう。他県の地産地消にも貢献しているわけですよ」と今井社長。「県産」の枠を超え、範囲を「国産」に広げた木材活用

の交流が進んでいるようだ。敷地内には丸太の山と、もう一つの小高い山がある。合板や突き板(薄くスライスした木)の製造過程で排出された廃材だ。1日に8トンも出るという。捨てればただのゴミだが再利用できないものか、と今井社長は考え、そこから始まった。「丸太の中身というものは、実



2019年に東京ビッグサイトで開催された「IFFT」の「e・wood+」の出展ブース。積み重なる地層を想わせるデザイン



工場の敷地内には丸太と、製造過程で排出された廃材が山積みになっている

ぶそれぞれの機械の前で従業員たちが黙々と作業をしている。

L字型に建つもう一方の工場の一角に、目当ての機械はあった。歯車が上下に噛み合う『e・wood+』の製造機だ。厚さ0・5mmの薄板が高さ6・5mmの波形となつてここから押し出されてくるのだ。試行錯誤を重ねて完成したというだけに、歯車のような機械に向ける今井社長の表情が感慨深げに映る。

『e・wood+』の生産には複数の会社関わっている。販売部門のWOOD MAKER JAPAN(株)と、製造部門の(株)ランバーテック工業と、(株)今井産業——この3社でIMAGI GROUP(イマイグループ)を形成している。単板の加工はモクテック工業(平川市高畑)が担当する。

際に割って中を見てみないと分からないものです。1本のうち使える部分はだいたい6割から7割。3割から4割が廃材となるのです。さらに良質な製品に使われるのがそこからまた

4割程度。製品歩留まりが悪く、はじかれた端材ゴミも再利用できれば資源になります。そうして10年前に誕生した新素材が『e・wood+』であった。

玉切りされた丸太が回転し、薄い板となつて出てくる様は、なるほどダイコンのかつら剥きにそっくりだ。そこから真っ直ぐに延びている工場の奥まで何十mあるのだろう。工程順に並

『e・wood+』の「e」は、ecology(環境に優しい)の「e」。今や世界のテーマは“環境”だ。海の魚やウミガメの



胃袋からエサと勘違いして食べたプラスチックの破片が出てくる。石油製品による環境汚染が地球規模で悪化している現実をテレビ映像は突き付ける。

人間がいなくなれば世界からゴミは消える、といわれる。人間が土に還れないゴミを造り出しているからだ。今井社長は話す。「プラスチック製のストローなどを自然に分解する物質に替える運動が起きていま

すが、WOODMAKERJAPANでも、ドラックストアなどの商品展示棚を従来のアクリル製品から『e・wood+』製に替える提案をして、採用いただくケースが増えているんです」

これはまだ試作の段階——と今井社長は前置きし、「トイレなんです。組立て式のトイレキット。災害があったときに避難場所の学校とかで使うトイレ



試行錯誤を重ねて完成した『e・wood+』の製造機

レです。紙製のダンボールだと壊れやすいし、濡れると弱い。その点『e・wood+』なら丈夫で、しかも紙と同様に軽い。最後には燃やせるし有害な物質も一切出ない。災害時に備えて家庭に常備されるようになれば、そのぶん廃材の量が減る



作業行程順に機械が並ぶランパーテック工業の工場内

ことになるんです」。商品化が近い段階まで進んでいるそうだ。

建築家が「波形」に着目 自社ショールームに採用

一方、木製ダンボールの「波形」は建築の内装材として面白さを持つ。平板な内装材よりも波打つ形状が空間に動きや立体感をもたらすのだ。着目した建築家が山路哲生氏である。2018年に東京の六本木に完成した新たなランドマークとなるレンタルビル「TRISEVEN ROPPONGI」を設計したのが山路氏。経済ニュースを発信する㈱ニューズピックス社が3階に開設したイベントスペースのカウンターの壁面に『e・wood+』波形ボードを採用した。

また同年、東京ビッグサイトで開催された「IFFT」(インテリア・ライフ・スタイル展)でも、山路氏は『e・wood+』の出展ブースを、波形を生かし

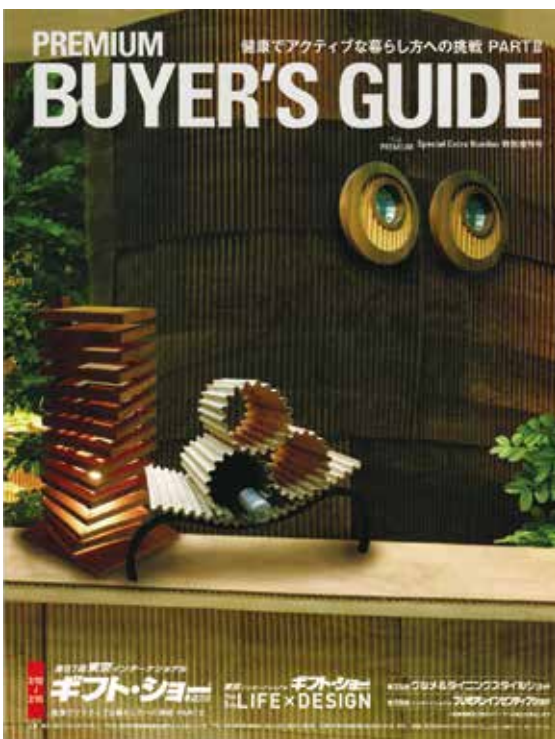


『e・wood+』の波形ボードが採用されたイベントスペースのカウンターの壁面(六本木のレンタルビル)

て大きな「うねり」として表現した。「IFFT」は海外商談会の登竜門であり、『e・wood+』はそこから世界へ発信されたのだ。

山路氏はまた、2019年開催の「IFFT」の出版ブースも手掛けた。前年の波のうねりとは対照的な、動きを抑え

た、積み重なる地層を想わせるデザイン。それを背景に、家具・器具の什器を展示する店舗空間を創出した。さらに山路氏は、2019年に設計事務所を銀座の貸ビルの1階に移して、ショールームの内装にも『e・wood+』を採用。それほどに惚れ込んでいる。



『PREMIUM BUYER'S GUIDE』の表紙に採用された『e・wood+』の作品

「山路氏だけでなく、同じ建築家の芦沢啓治氏も設計段階で『e・wood+』を取り入れてくれるのが大きいですね。お二人ともその業界では名前だけで通るような著名な建築家ですから、『e・wood+』に目をかけてくださってありがた

R'S GUIDE』。2019年2月にビッグサイトで開かれた「ギフト・ショー」の出版社を紹介した雑誌だという。今井社長が「ここです」と指差したのは、表紙だった。波形ボードでくるんだワインの瓶。隣にはタワーの模型のように四角いボードを積み重ねた照明器具。その背景の、丸い目が2つ付いたロボットの顔を連想させる壁面も波形ボードなのだった。パソコンで画像を貼り合わせてデ

を継続している効果ですね」

今井社長が応接室のテーブルに雑誌を載せた。タイトルが『PREMIUM BUYER'S GUIDE』



新発売された「HARERUWOOD」

「こんな照明器具を
購入した人たちが、
Wood+』の波形
ボードなど各部材を
販売されている『e・
として、東急ハンズで
消費サイトとの動き
交流の賜物だ。一方、
も、展示会を通じた
社(全国販売規模会
ートナー会」の発足
社)20社からなる「パ
では、建築家や雑誌ばかり
ではない。家電販売
やイベント会社、商
社など全国の中堅会
社(全国販売規模会
社)20社からなる「パ

「e・wood+』の姉妹品が
生まれ、今井社
長。『e・wood+』に使っ
ている特殊な接着剤で発泡スチ
ロールの両面に突き板を貼った
もので、商品名は「HARER
WOOD」(ハレルウッド)で
す」。軽く、主婦でも腰壁などに
簡単に両面テープで貼れるこ
とから「貼れるウッド」。これも
原料は『e・wood+』と同
じ廃材だ。すでに東急ハンズで
販売されている。
県産スギやリンゴ樹の端材
から生み出された青森県産の
新素材は、「環境のうねり」に
乗って進化し続ける。

デザインしたものらしい。
「雑誌を発行している会社から
1年前に連絡がきたんですよ。
表紙に使いたいと。2019年
2月にビッグサイトで開かれる
『第87回東京インターナシヨナ
ル ギフト・ショー』で販売する
雑誌で、発行しているその会社
(株)ビジネスガイド社)がギフ
トショーを主催しているんだそ
うです。240ページもあつて
1万3000部も発行している

消費者のアイデア届く 木肌生かした照明器具

木のダンボールが取り持つ

「縁」は、建築家や雑誌ばかり

ではない。家電販売

やイベント会社、商

社など全国の中堅会

社(全国販売規模会

社)20社からなる「パ

ートナー会」の発足

も、展示会を通じた

交流の賜物だ。一方、

消費サイトとの動き

として、東急ハンズで

販売されている『e・

Wood+』の波形

ボードなど各部材を

購入した人たちが、

こんな照明器具を

作ってみた」と作品が寄せられ
るようになったのが3年前。2
018年3月には、ネット通販
の『amazon』と提携とい
う大きな動きがあった。ネット
で世界とつながる巨大なショー
ルームのようなamazon
から『e・wood+』製のキッ
ト商品が売り出されることにな
った。

「e・wood+』の姉妹品が

生まれ、今井社

長。『e・wood+』に使っ

ている特殊な接着剤で発泡スチ

ロールの両面に突き板を貼った

もので、商品名は「HARER

WOOD」(ハレルウッド)で

す」。軽く、主婦でも腰壁などに

簡単に両面テープで貼れるこ

とから「貼れるウッド」。これも

原料は『e・wood+』と同

じ廃材だ。すでに東急ハンズで

販売されている。

県産スギやリンゴ樹の端材

から生み出された青森県産の

新素材は、「環境のうねり」に

乗って進化し続ける。



自然のぬくもり暮らしの中に

株式会社 今井産業

本

社 ● 平川市新館藤山16-1

TEL.0172-44-2145 FAX.0172-44-2568

http://www.nijiironomori.net

弘前常設展示場 ● 弘前市泉野3丁目16-4

TEL.0172-55-0440 FAX.0172-55-0441

E-mail: llp-genki@clear.ocn.ne.jp

青森常設展示場 ● 青森市富田4丁目12-22

TEL.017-752-0981



薪ストーブプロデュース

Wood rack ウォッドラック

雑木林の陰で見えない湯の島を“出す” 立木伐採にオーナーズクラブ本領発揮

『浅虫伐木デスマッチ』参加者募集!!——ウッドラックのFace bookに目が留まった。『デスマッチ』とは過激。いかにもスタツフのブライヤーウー

マン!こと石村真弓さん好みのネーミングだ。浅虫の雑木林で立木の伐採を行うのでウッドラックオーナーズクラブの仲間たちよ力を貸してくれ——とい



①チルホルのワイヤーを巻き上げるW氏 ②ケヤキの幹にチェーンソーで切り込みを入れる

う呼びかけなのだ。チェーンソーで伐り倒した丸太は各自が玉切りして持ち帰る。薪

ストーブ愛好家たちにはその薪が報酬だ。

5月初めから開始し、すでに6回を数えている。

7回目に、相馬壮代表からその模様の取材を依頼された。まさに『デスマッチ』、樹齢50年のケヤキを倒す人と樹との死闘に手に汗を握った。

場所は、浅虫の坂を上った高台にある護国寺(浅虫高野山陸奥護国寺)。周囲を囲むように雑木林が茂っている境内で今年7月(2019年)、『ダイニングアウト』という大きなイベントが開かれるのだという。全国の中から選出された会場で風景と一流シェフの食事を味わおうという、いわば目と口で楽しむ『プレミアムな野外レストラン』



伐採に奮闘するオーナーズクラブの皆さん

なのだが、問題があった。境内から、浅虫の観光スポットである『湯の島』が雑木林の陰になつて見えないのだ。

そこで浅虫観光協会が白羽の矢を立てたのがウッドラック。昨年(2018年)浅虫にシヨールームを移転オープンした薪ストーブプロショップだ。「同じ町内となった浅虫のためなら」と相馬代表は一肌脱ぐことにした。

境内の平場に、薪用に玉切りされた丸太が積みまれてあった。「伐採現場はここです」と相馬代表が足元から急な崖になつ

ている斜面の雑木林を指さす。「もうだいたい(立木を)倒したんですけれど、まだ島が出ないんで

物が残っていた。それがケヤキだ。しかも、かなり傾いて立っている。

れているんです」

倒そうとする人、倒されまいとするケヤキとのタタカイが始まった。地上10mほどの2股に分かれた幹の片方にロープを固定し、反対のロープの端を、

5月下旬の日曜日。参加したのはWさん、Aさん、Oさんにご常連の顔ぶれ。チェンソーも薪割りも難なくこなす、林業はだし”の腕前で、今回のポラントピアで本領発揮だ。「そのオーナーズクラブのことを書いてほしいんです」と相馬代表。「ウッドラックの応援というより、地元青森県の浅虫という地域のために土日返上で協力してく

手動ウインチのチルホルルのワイヤーに結び付ける。A氏が、倒す側の根元近くにチェンソーで三角形の『受け口』を付けた。その真後ろに『追い口』の切り込みを水平に入れ、準備完了。開始の合図の笛が鳴った。オーナーズクラブ”隊長”のW氏がチンホルのバーを漕ぐようにしてワイヤーを巻き上げる。繋いだロープが張っていく。巻く。ピュンピュン鳴り出したのは張り詰めたロープだ。そこからがデスマッチだった。

重いっ！ W氏が吠えた。力自慢が必死の形相でバーを引こうとするが動かない。鳴るロープが今にも切れそうだ。交代したO氏も、両脚を踏ん張り渾身の力を込める。ロープが動いているかどうかは分からない



伐採後、湯の島が現れた



ついに倒れたケヤキ

が、それでも徐々に、上方の梢に変化が現れ出した。湯の島の奥、水平線の山並みに覆いかぶ

さるように見える梢が、浮き出したのだ。W氏が吠える。O氏が唸る。起き上がった梢



倒した木を玉切りして薪にする

が、ついに手前に傾きかけた。行けいけっ！ レバーが軽くなった。どんどん巻く。倒れるっ！力尽きたケヤキが前のめりにドーンと倒れ込んだ。湯の島が出た！

浅虫町内の店主の協力 仲間たちの奮闘に感謝

6月初めに伐木は無事終

了。石村さんがFacebookで、「浅虫町内のご店主の皆様が大量の玉切りを人力で平場まで運搬してくださり大助かりでした」と感謝。相馬代表は、「斜面に立つ立木の伐採は難しく危険でもありました。皆で協力し合って凄い作業をやり遂げましたね」とオーナーズクラブの奮闘を讃えた。

世界のストーブを展示 浅虫・ショールーム



クッキングストーブ



ペレットストーブと薪ストーブの競演



マニア垂涎の薪ストーブが一堂に



ネスターマーティン TQH33



チェーンソーコーナー



薪割りの斧もいろいろ



青森県内ではウッドラックでしか扱っていないという
ベチカの「ティーレリ」



■営業時間
10時～17時までとなっております
が、留守もあるため見学を希望され
る方は日時を電話で予約できます。
電話080-5567-0965(相馬壮)
また営業時間後でも対応致しますの
でお立ち寄りください。

薪ストーブと
木の雑貨
Wood rack
ウッドラック

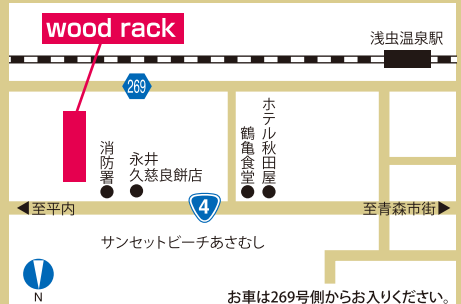
青森市浅虫坂本51-9

TEL.017-752-0133 FAX.017-752-0134

E-mail : info@woodrack.jp



ウッドラック
オーナーズクラブマーク



薪ストーブ愛好会くくべる部

企業組合 県木住

みちのく薪びと祭りin青森おおわに

山に囲まれた大鰐町早瀬野にある「わにもっこ」の入り口に、『みちのく薪びと祭り』の旗が立っていた。大鰐の「わに」と木工の「もっこ」を組み合わせた、わにもっこ企業組合。工房の脇に建つヒバのログハウス「迎賓館」を会場に、『みちのく薪びと祭り』が2日間にわたり開催されるのだ。参加者は約50人。秋田との県境に近い南津軽郡大鰐町の山里に、東北6県からだけでなく、広島や四国からも駆け付けるといふのだから、今や「薪の火を広げる運動」は全国に広がりつつある現実を知って驚いた。

薪文化の輪を再び全国に広げよう

『みちのく薪びと祭り』大鰐で開催

活動の目的は、「森林資源が豊かな東北地方の薪文化の発展を目指し、実際の活動を基にした情報や意見交換を行うこと」――。山形を皮切りに年1回開催してきた薪びと祭りの第6回目が今年（2019年）11月に大鰐で行われる、という案内が薪ストーブ愛好会「くくべる部」（佐々木奥男会長）から1カ月前に届いていた。「くくべる部」と、環境活動を支援する東北環境パートナーシップオフィス（EPO東北）が主催する。「くくべる部」は、企業組合県木住（佐藤時彦代表、青森市）のユウザーで組織する薪ストーブ愛好会。県木住は「地域の木」を旗印に青森県の山に育った木を使う家づくりと、薪ストーブの



『みちのく薪びと祭り』の参加者の皆さん(旧大鰐第三小学校を活用した、おおわに自然村生ハム工房のグラウンドで)



▲参加者を招く幟

会場となったヒバログハウス「迎賓館」▶

ある暮らしの普及に取り組んでおり、「くべる部」の佐々木会長もユーザーの1人。県木住で自宅を建てた際に体験した、施主自らチェーンソーでスギの立木を伐り倒す醍醐味に魅了され、「伐木等の業務に係る特別教育（大径木）」を受けて林業従事者の資格を取得したほどの「熱い人」だ。

一方、東北環境パートナーシップオフィス（EPO東北）は、東北地域の環境活動を促進するため、人と人をつなぐ拠点となることを目的として2006年に開設された。行政や企業、市民、団体などさまざまな分野の人や組織が交流するきっかけ作りを担い、環境活動の輪が広がるよう支援してい

る。

2011年の東日本大震災による停電で光が失われた暗闇にぽつんと浮かんでいた窓の明かり——。薪ストーブを焚いていた家の明かりだった。それが薪ストーブを見直すきっかけとなり、改めて燃料の「薪」を地域のエネルギー資源として見直そうと始まった活動が『み

ちのく薪びと祭り』だと、EPO東北総括の井上郡康氏くによすは経緯を話す。

東北一巡のトリとなる第6回目を「くべる部」が主催することになったのは、県木住の佐藤代表がこれまで『薪びと祭り』に参加し、交流してきた繋がりから実現したものだ。

〈木水土〉で森は成り立つ 人類の未来に通じる『柱』

初日の第1部は「講演」、第2部が各地区の「活動報告」、第3部が「分科会」。2日目は、薪ストーブプロシヨップ「ウッドラック」（相馬壮代表、青森市）のスタッフによる薪割りや焚き付け安全講座、チェーンソー安全講座などが行われた。

青森で今、「環境」といえば佐々木豊志氏だ。青森大学の総合経営学部学科教授。大学祭で薪割りをしたり、雑木林を整備する学生たちの活動をフェイスブックで発信するなど環境問題を熱く訴えている。佐々木



㊤開会の挨拶に立つ県木住の佐藤時彦代表(右端) ㊦「くべる部」の佐々木奥男会長(右端)

教授は講演の冒頭、スクリーンに「森」の漢字を映し出した。……が、よく見ると「森」ではなく、へ木水土を組み合わせ、それを「モリ」と読ませるらし

い。佐々木教授が説明する。「確かに『森』は『木』だけでなく『水』も『土』もあつて形成されているのですから、この作字した『森』のほうが的確に表わしてい

ると言えます。この『森』をタイトルに使った著書『森はマンダラ(萬書房)を出版した方が徳村彰氏です」
徳村氏は1928年、金沢

市生まれで今年91歳。通称「おじじ」。17歳のときに広島で被爆し、40歳で余命2年と宣告される。北海道への移住を決意、電気もガスもない森の中の暮らしを始めた。

「おじじは『森』に住むようになってから、ご本人の言葉を借りれば『体内の細胞が生まれ変わった』ように健康を取り戻し、今も健在です。『森はマンダラ』には、便利なものが一つもない『森』で24年間生きて辿り着いた悟りの境地が書かれています。この『森』の中にこそ子供たちの将来につながり、かつ人類の未来が拓ける道があると述べているのです」と佐々木教授。薪を燃やして木と親しむ暮らしが「森」へ通じる、と訴えた。

八戸市森林組合の工藤義治氏(業務課長)は講演「日本型林業用作業着の開発」で、今回の薪びと祭りのテーマである「安全」について述べた。最近のおしゃれな林業の作業着は、輸入品だと思われるが、実は



スクリーンに映し出された「森(モリ)」の字について説明する佐々木豊志教授

デザインや商品開発に工藤氏が関わっているのだという興味深い話に関心を集めた。「林業」というと、ほっかむりをしたおやじが山奥でノコを挽いて樹を伐つる昔のイメージが根強くありますが、いつまでもそうでは若者は集まりません。それで、まず服装にファッション性を持たせようと開発に取り組んだわけです。若者ウケするように、カッコいい輸入物のデザインの模倣から始まりましたけど、いくらカッコが良



なるほど「森」は木だけで成り立っているわけではない、と佐々木教授の話に納得顔

くても、機能が伴っていないければだめです。スマートすぎて体が動かしにくかったり、防水性は高いけど生地が重すぎたりすると疲れて事故に結び付きやすくなります。デザイン性と安全性の両立を目指して試行錯誤でしたね。それと、色の問題もあります。森の中で発見しやすいのはオレンジ色だとも言われるけど、オレンジ色にも種類があつて、森に入ってしまうと全然目立たなくなるものもあります。人の姿が見えないところに重大な事故が潜んでいるのです。結論は、蛍光色のオレンジのほうが目立ちますけど、それだと今度は汚れが目立つ問題もあつたりしてね……」

東北では立木の伐倒りゆうぼくによる死亡事故が毎年発生している。青森県でも2019年は2件発生。伐倒だけでなく、チェーンソーのキックバックによって足に負うケガをなくすためには靴にも一工夫が必要だ、と工藤氏は強調した。

地域通貨で間伐材買う 草も茅葺の材料に利用

広島から参加した「芸北高原の自然館」主任学芸員の白川勝信氏は「活動報告」で、「地域通貨」を活用する取り組みを紹介した。「せどやま」（裏山・里山）の木を搬出してくれた人（山）に、森林整備の対価として「せどやま券」（地域通貨）で支払うというしくみで、木を実勢価格より高く買い入れることにより木材の有効利用と、山仕事の復権を目指す「再生」が目的。



カッコ良さと安全性の両立を目指して試行錯誤、と苦労話を披露する工藤氏

軽トラに積載できる2m足らずの短材でも買い入れるようにしたこと、より多くの人気が軽に山仕事に関われるようになったという。

「地域通貨」のことを、白川氏は「腐るお金」と表現する。それについてこう話した。

「間伐した木を『現金』で買うのではなく、『せどやま券』という地域通貨で支払うところがミソです。地域通貨とはその地域だけ使えるお金で、このお金の使える期限を設けるのです。物々交換していた昔は、交換し

た魚や野菜を早く食べないと腐ってしまうから、貯めることはしませんでした。通貨も魚や野菜と一緒にだという捉え方が「腐るお金」なんです。いつまでも腐らないのが現在のお金で、腐らないと「貯め込む」ようになり、儲かるとなればたくさんお金を持っている大手が入ってくる。そうなる、原点である「地域」から離れてしまう。そこで、お金の使える期限を設けて早く地域で消費させる。目的は「地域循環」なのです。地域から離れて儲けばかりを追求する

と、国内の山々に森林資源が豊かにあるのに海外から儲かる石油を運んでくる現在の日本のようになってしまいます」

白川氏はまた、新たに始めた「芸北茅プロジェクト」についても紹介した。

「小学6年生のときに『せどやま再生事業』に参加した子どもたちが、中学校に入学して、草原保全のために草刈りをしています。それまで利用先のない草を、茅葺き屋根の材料にしようという取り組みがこのプロジェクトです。芸北中学校



りんごの剪定枝や古木を薪に使っているというりんご農家（弘前市）の久保田勝二氏の体験談

を中心に、廃校の体育館を利用して地域の人が持参した茅を子どもたちが地域通貨で買い入れて、それを売ります。『茅金市場』と呼んでいます。周囲の山や草原に向ける子供たちの目が生き生きと輝くようになりましたよ。その励みが子供たちを育てるし、地域もまた育っていくんです」

家族の関係変える“火”人が集まる薪ストーブ

「分科会」は3グループに分かれて行われた。「薪づくりの安全対策」など同じテーマで意見を出し合い、その取りまとめをグループごとに報告し合った。次のような意見が出された。

「楽しいはずの薪ストーブライフが薪づくりの思わぬケガで台無しになってしまいます。斧を振り下ろすと同時に膝を曲げるのがコツだと薪割り体験に参加して知りました。学ぶ姿勢がケガ防止になるはず」、「大きな樹木をチェーンソーで伐り倒す作

業には重大な事故がつきまとう。我流ではなく、きちんと講習を受ける姿勢が大事だ」、「バイオマス発電が増えるのは結構だが、燃料の木材の奪い合いに発展している地域もある。資源を守り維持するためにも供

給態勢をしつかりと管理していくシステムが必要」、「ドイツでは家の外に薪が積んであるのがごく当たり前のことです。国内がそうなっています。日本もそうならば自ずと『薪びと祭り』の運動は必要なくなります。そ

うなつてほしいものです」……。薪ストーブは人と人とのつながりを変える——。青森大学の柏谷至教授（社会学部教授）が、自宅に薪ストーブを設置してから家族に起きた変化について体験を基に話した。



⑤活動発表する[EPOちゅうごく]の白川勝信氏(左)、西村浩美氏 ⑥[四国EPO]の常川真由美氏



同じテーマで語り合った「分科会」での提案や意見などをそれぞれ報告

いる

火を焚きなさい

お前達の心残りの遊びをやめて
大昔の心にかえり

火を焚きなさい

.....

翌2日目は、迎賓館からすぐの「おおわに自然村生ハム工房」へ移動。旧大鰐第三小学校だったグラウンドで、りんごの木の新割り講座や、薪割り・焚き付け講座、チェンソー講座、薪割り機講座、薪ストーブ着火講座が行われた。薪びとたちの熱い思いが反響するかのよう
に、乾いた薪割りの音が、高鳴るチェンソーのエンジン音が山あいに響き渡った。

原木住 佐藤時彦コメント

「薪ストーブの魅力を知ってしまった人」がこんなにたくさんいる。それを知った第1回の『みちのく薪びと祭り』から今年は東北一巡ファイナルで本県開催。薪ストーブの暮らしってこんなにいいんだよ、もっと広め

子の下で／山尾三省詩集より）
を朗読した。

山に夕闇がせまる

子供達よ

ほら もう夜が背中まできて

もなりました。人と人とのつながりを変える力が薪ストーブにはあるのだと実感しました」

「講評」で、青森大学の藤公晴教授（社会学部）が、61行の長い詩

『火を焚きなさい』（びろう葉帽

「薪ストーブを付けてから、娘が自分から進んで焚き付けをするようになりました。薪の火には引き寄せる魅力があるのですね。娘だけでなく、家族もストーブの周りに集まるように



2日目。旧大鰐第三小学校のグラウンドで、りんごの木の薪割り講座やチェンソー講座などが開催された

なきや!! 知らないなんでもつ
たいない”——薪ストーブユー
ザーさんはそう思うのではな
いでしょうか。とは言え、誰にも
時間は限られているわけです。
休みの日に旅行に出かけるのも

自由。スポーツをするのも自
由。本を読むのも自由。薪づく
りするのも自由。自分が楽しく
なる時間の使いかたは? 『薪
割り』は楽しい・気持ちがいい。
家族サービスとはちよつと違う

けれど、家族で薪をつくる時間
を楽しむ。そして冬…自分たち
が準備した薪の炎でまったりす
る特別な家族時間。薪びと祭り
の今後の楽しい展開を薪割り
しながら考えようと思います。

薪ストーブ愛好会「くべる部」

〈事務局〉企業組合 県木住

青森市松原1丁目16-25 青森県森林組合会館内2F・3F

TEL.017-732-5333 FAX.017-732-5777

<http://www.kenmokuju.com>

E-mail : info@kenmokuju.com

ブログ「くべる部」奮闘日記

<http://kuberube.jugem.jp/>

